

## リスク状況下における意思決定 — リスク認知とリスクテイキング行動との関連 —

元 吉 忠 寛

### 【問題と目的】

現代社会において、“リスク”という言葉は、多種多様な場面で使用されており、またリスクという言葉を使っていなくても、実際にはリスクに関連しているという場面が数多く存在する。リスクテイキング行動(以下、リスク行動と略記)に関する研究によって、これまでに多くの知見が蓄積されてきた。Zuckerman (1979) は刺激欲求というパーソナリティが身体的なリスク行動と関連することを見出している。また、Tversky & Kahneman (1986) は利得・損失という状況要因がリスク行動に影響を与えることを示した。しかし、リスク行動は状況を越えて一貫しているのか、あるいは、特定のリスク行動において明らかになった状況要因の影響が他のリスク行動に対してどの程度一般化できるのかなどについては、一貫した結果が得られていない。そこで、これまでに得られた知見を統合するために、複数のリスク行動を取り上げ、認知的側面を重視したアプローチによってリスク行動を検討する研究が行われるようになってきた(e.g., Bromiley & Curley, 1992)。

本研究では、リスク行動の認知的側面を重視する。複数のリスク行動を取り上げ、それぞれのリスク行動が人々にどのように認知されているのかを明らかにし、リスク行動の相互比較と分類を行うことを目的とする。そして、リスク認知とリスク志向性や実際の経験との関連について検討する。さらに、それぞれのリスク行動におけるリスク志向性や経験の個人差を、認知的な側面と刺激欲求というパーソナリティによって検討することによって、これまで別々に論じられてきたそれぞれのリスク行動に対して包括的な検討を行うことを目的とする。さらに、現実場面におけるリスク行動として、大学受験を取り上げ、意思決定の認知的プロセスをリスク行動としての側面から明らかにする。

### 【研究Ⅰ】

**目的** 複数のリスク行動に対するリスク認知の共通点と相違点について検討し、認知次元からリスク行動の分類を行う。さらに、リスク認知とリスク志向性や実際の経験との関連について検討を加える。

**方法** 4年生大学と短期大学の学生438名(男性256名、女性181名、不明1名)を調査対象とした。7つのリスク行動(競馬、パチンコ、宝くじ、大学受験、自動車事

故を起こすこと、タバコが健康に害をおよぼすこと、避妊具をつけない性交渉による妊娠の可能性)に対してそれぞれのリスク認知、リスク志向性、実際の経験について回答を求めた。調査時期は、1998年6月から7月であった。

**結果と考察** 階層的な主成分分析によって、7つのリスク行動が、興奮度、危険性、運の関与、スキルの関与の4次元によって解釈できることが明らかになった。このうちの興奮度と危険性の次元によって、7つのリスク行動を、ギャンブルと人生や生命におけるリスク行動の2つに分類した。ギャンブルは、高興奮・低危険型のリスク行動であり、人生や生命におけるリスク行動は、低興奮・高危険型であることが明らかになった。また、危険性の次元は、それぞれのリスク行動のリスク志向性と関連していた。リスク行動に対するスキル関与の認知は多くのリスク行動において状況を越えて一貫していることが明らかになった。また、これらのリスク認知は実際の経験と関連していることが示された。

### 【研究Ⅱ】

**目的** リスク行動に関連するパーソナリティとして刺激欲求がある。研究Ⅰで得られた知見を元に、複数のリスク行動について、リスク志向性や経験の個人差と、認知的要因や刺激欲求というパーソナリティとの関連を検討する。

**方法** 大学生220名(男性189名、女性31名)を調査対象とした(研究Ⅰの分析には、本研究のデータも合わせて用いた)。研究Ⅰと同じ7種類のリスク行動に対して、それぞれのリスク認知、リスク志向性、経験について回答を求めた。さらに、刺激欲求尺度(古澤, 1989)に対して回答を求めた。

**結果と考察** 人生や生命におけるリスク行動のうち、身体的なリスクを伴うタバコにおいて、リスク志向性や経験と刺激欲求とが関連することが示された。ギャンブルにおいても、リスク志向性や経験は刺激欲求と関連した。大学受験においても、リスク志向性と刺激欲求とは関連した。これは、リスク行動のスキルの関与の認知が、刺激欲求とリスク行動の関連に影響を与えることを示唆するものであった。刺激欲求とそれぞれのリスク行動に対する認知との関連は弱く、一貫したものではなかった。このことから、刺激欲求が、認知的な側面を媒介してリ

スクテイキング行動に影響を与えるのではなく、直接リスクテイキング行動の個人差に影響を与えていることが示唆された。また、リスク行動に対する認知は、経験によって変化するものであることも示唆された。

### 【研究Ⅲ】

**目的** リスク行動として大学受験を取り上げて検討を行う。大学受験をリスク行動という側面から見た場合に、実際の受験生がどのように自分の合格可能性を認知し、意思決定に影響を与えるのかについて、自己認知などの認知的な側面から検討する。

#### 調査Ⅰ

**方法** 1998年2月25日の国立大学入学試験の二次試験後に国立N大学およびM大学の受験生、各300名、合計600名に調査用紙を配布し、合格発表が行われる前までに郵送による回収を行った。回収率は24.5%で、147名（男性105名、女性42名；現役生119名、浪人生28名）が分析に用いられた。質問項目は、受験学部、性別などの基礎データ、受験した大学の客観的・主観的合格可能性、リスク志向性、自己認知など、計53項目であった。

**結果と考察** 受験生の主観的合格可能性の認知は、模擬試験の結果をもとにして推測されており、客観的合格可能性よりも高く認知されていた。受験生は客観的合格可能性が低くても、主観的には高く認知しており、実際に受験することが示された。これは、自己へのポジティブ幻想（Taylor & Brown, 1988）であると解釈できた。リスク志向性が高いものは客観的合格可能性が低くても受験すること、自己の努力認知の高いものは主観的合格可能性も高いこと、能力認知が高いものは、リスク志向性が高いことが明らかになった。

#### 調査Ⅱ

**方法** A予備校に通う学生464名（男性356名、女性108名）が調査対象であった。被験者は国立大学を第一志望にしている学生であった。1998年9月に、質問紙によって、主観的合格可能性、リスク志向性、自己認知などについて回答を求めた。客観的合格可能性としては模擬試験の成績を用いた。質問紙調査と模擬試験において第一志望が一致していた177名を分析に用いた。

**結果と考察** 受験生が、模擬試験をもとに主観的合格可能性を推測していることが確認された。客観的合格可能性の低い人は、主観的合格可能性を高く認知するというポジティブ幻想が確認された。しかし、客観的合格可能性の高い人は、主観的合格可能性を低く認知しており、結果は一貫していなかった。自己の努力認知や能力認知が高いものは、主観的合格可能性を高く認知していることが示された。自己の能力や努力認知や、リスク志向性

によって、意思決定が異なることが示唆された。また、受験する本研究の結果を研究Ⅰの結果と比較した結果、経験や立場の違いが、大学受験に対する認知に影響を与えることが示された。この結果は、リスク認知が経験によって変化することを示唆するものであった。

### 【総合的考察】

本研究で取り上げた7つのリスク行動には共通の認知構造が存在することが明らかになった。そのうち、興奮度と危険性の次元によって、高興奮・低危険型のギャンブルと、低興奮・高危険型の人生や生命におけるリスク行動に分類できることが明らかになった。また、スキルの関与は、タバコ以外のすべてのリスク行動に共通して認知されていることが明らかになった。

リスク行動の認知について、経験者と未経験者では違いがあることが明らかになった。刺激欲求がリスク認知とは関連が弱く、直接的にリスク志向性や経験と関連すること、大学生と受験生では大学受験に対するリスク認知に違いがあったことなどから、経験によってリスク認知が変化するという因果関係が示唆された。

刺激欲求が身体的なリスク行動と関連していることが確認された。また、ギャンブルにおいても、実際の経験やリスク志向性と関連していることが明らかになった。さらに、大学受験においても刺激欲求とのリスク志向性との関連が明らかにされた。これらの結果から、刺激欲求の個人差は、身体的なリスク行動と関連していることのほかに、ギャンブルや、スキルの関与の高いリスク行動とも関連していることが示された。しかし、刺激欲求とリスク行動の認知の関連は一貫していなかったことから、刺激欲求が、認知的な要因を媒介してリスク行動に影響を与えているのではなく、直接リスク行動に影響を与えていることが示唆された。

また、大学受験における意思決定プロセスについてリスク行動としての側面から検討した結果、主観的合格可能性が、客観的合格可能性よりも高く認知されていることが明らかになった。そして、主観的合格可能性は、自己の努力認知や能力認知の高い人が高く認知していることが明らかになった。この自己認知は、客観的合格可能性とは関連が弱く、客観的評価にもとづく正当な評価ではなく、主観的な歪んだ認知であることが示唆された。したがって、自己の歪んだ認知によって、客観的合格可能性が高く認知され、受験の意思決定に影響を与えるという過程の存在が示唆された。

今後、より多くのリスク行動に対しても同様の認知構造が存在するのを確認し、それぞれのリスク行動についてより詳細な検討をする必要がある。